

明治六年一月一日發兌

許官印

改曆辨

福澤諭吉著

慶應義塾藏版



改曆辨

大陽曆と大陰曆との辨別

福澤諭吉 著

此度大陰曆を止て大陽曆とす一明治五年十二

月三日を明治六年一月一日と定めたるハ一年

俄小二十七日の相違ふて其間ハ其を怪む者

も多からんと思ひ西洋の書を調て彼の國は行

そる大陽曆と古来支那日本等小用る大陰曆

との相違を示すこと左の如し

小六億里の道を走ることなり大陽曆ハこの勘
定を本小して日輪の周圍小地球の一廻する間
を一年と定めたるものなり然る小此一廻の間
丁度三百六十五日なりバ千年も万年も同ト曆
小て差支ふき答なきとも六十五日の上端ハ六
時といふものなりて毎年六時づつ後ハ四年目
小ハ四六二十四時即ち一日の後とナルゆへ四
年目小ハ一日増して其間小地球を走らしめ丁
度本の題小行付を待つなり即是閏年なり右の

如く大陽曆ハ日輪と地球とを照し合せて其互
小釣合ふ題を以て一年の日數を定たるもの也
忽春夏秋冬寒暖の差毎年異なりことふく何月
何日といへバ丁度去年の其日と同ト時候不て
種を時く小も稻を刈る小も態々曆を出して節
を見る小及不を去去年の彼岸ハ三月の二十一日
なりバ今年の彼岸も丁度其日なり且毎年の日
數同様なるゆへ一年と定めて約条したる事ハ
丁度一年の日數小て閏月の為ハ一箇月の損徳

あることなり。其外の便利ハ一々計へ擧る不及
をざるまとなり。唯此後ハ所謂晦日小月を見る
ことあるべし。數を知らざる無學の人ハ一時
目を驚りその不便ある乎。文盲人の不便ハ氣
の毒かぐら顧る小暇あるも其便不便ハ暫く閣
き兎も角小日輪ハ本なり月ハ附ものなり。附も
のを當かせざし々本小由て曆を立るハ事柄不
於て正木き道といふべし。其法なり。月
大陰曆ハ月を目當小し々定たる曆の法なり。月

此地球の周圍を廻るもの小て其實ハ二十七
日と八時小て一廻也。れども日と地球と月と
の鈞合小て丁度一廻して本の處小歸る小ハ二
十九日と十三時なり。大陰曆ハ毎月十五日の夜
小圓き月を見る趣向なり。れども右の二十九日と
十三時を十二合せて十二箇月としてハ三百六
十五日小足らざ即ち月ハ既ハ十二度地球の周
圍を廻るたきども地球ハハよど日輪の周圍を
一廻せざるなり。此差九二年半余小して一月計

なるゆゑ其時小至り閏月を置き十三月を十年
とふ地球の進で本の夏小行付を待たり又こ
をを譬へバゆまよ三百六十五文拂ふべき借
金を毎月二十九文五分づの餘口小て十二箇
月拂へバ一年小九十一文づの不足あり十一
文づ二年半余も滞らが大抵三十文計りの
引負もなりべし閏月ハ即ちこの二十文の引負
を一月小よとめ又拂ふにそり知り或は右め次
弟小て大陰曆ハ春夏秋冬の節小拍らど二年の

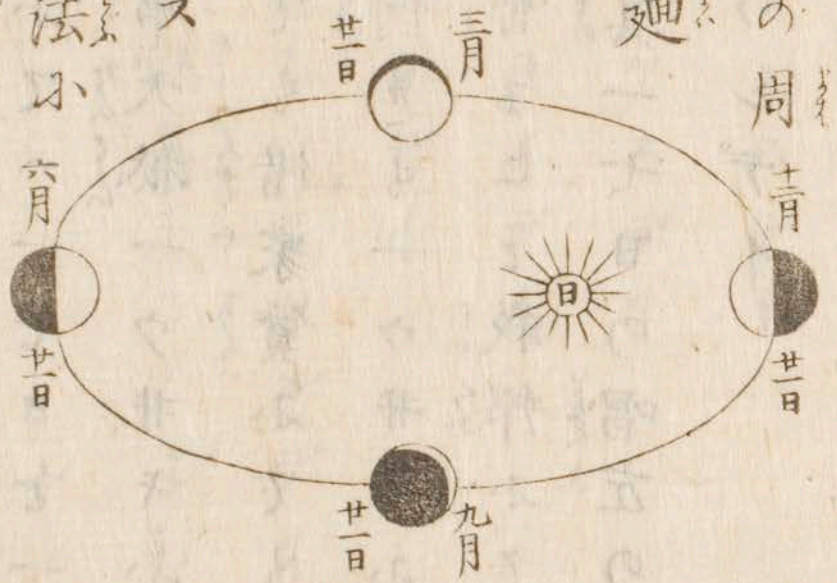
日數を定るものふれば去年の何月何日と今年
の其日とハ唯唱のと同様なりとも四季の節ハ
必ず相違せり故小入梅土用彼岸かどて農業
の節ハ一々曆を見どまバ叶えぬおとくまきり
且又これよでの曆小ハつよぬ吉凶を記し黒
日の白日のとり記もそかぬ日柄を定たまバ
壺間小曆の廣く引る不ど迷の種を多く増し或
ハ婚禮の日限を延し或ハ轉宅の時を縮め或ハ
旅立の日小後きて河止小逢ふり或ハ暑中

小葬礼の日を延して死人の腐敗するも何れ一
年と定めたる奉公人の給金八十二箇月の間小
も十兩十三箇月の間小も十兩なりは一箇月ハ
たゞ奉公するなりたゞ給金を拂ふ何れ小も一
方の損なり其外の都合計る小違ひは是皆
大陰曆の正しかりざる患なり
右の次第小て此度大陰曆を改めて大陽曆と為
し俄小二十七日の差を起したるも少くも怪
む小足らざる事実の損小も何れ小徳小も何れ小

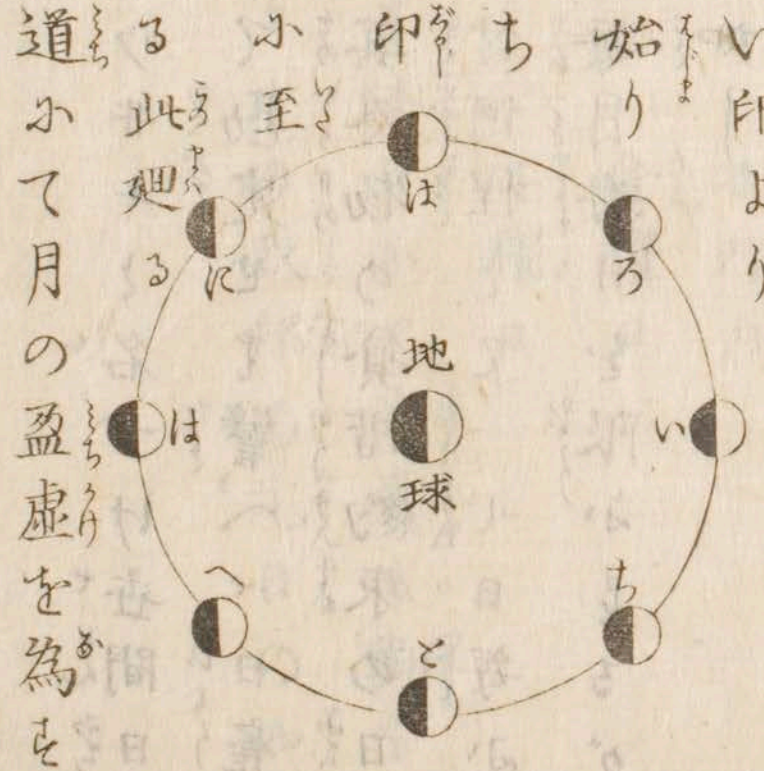
千萬歳の後小至るまで此の便利を増したる小
も都て人たる者ハ常小物事小心を留め世小新
らしき事の起ること何れ小何故何れ小斯る事
の出来しやとよく其本を詮索せざるべからず
其本の由縁をさへ辨き如何なる新奇なる事
小くも怪む小足るものなり此度の改曆小ても
其誤を知らざりて十二月の三日が正月の元日
小ふると計り以て夢中小こきを聞き夢中小
これを傳へふハ実小驚くべき事なりと平生

ようり人の讀むべき書物を讀む物事の道理を辨
 べよよく其本を尋ねば少くも不思議なる事小
 以て故に日本國中の人民此改替を怪む人ハ
 必し無學文盲の馬鹿者なり此を怪むまざる
 者ハ必し平生學問の心掛はる知者なりされバ
 此度の一条ハ日本國中の知者と馬鹿者とを區
 別する吟味の問題といふも可なり

地球の舞かごと
 日輪の周
 圍を廻
 る圖
 此道
 程イ
 ギリス
 の里法
 小
 て六億
 里なり



地球の周
 圍小月の廻る圖
 い印より
 始り



地球の周
 圍小月の廻る圖
 い印より
 始り
 ち
 ろ
 い
 ち
 と
 へ
 は
 に
 小至
 り此廻る
 道
 小て月の盈虚を為す

ウ井キの日の名

西洋おてハ一七日を一ウ井キと名づけ、
用の事大抵一ウ井キおて勘定せし、
譬へバ日雇賃おても借家賃おても、
其外物の貸借約束の日、
限皆何きも一ウ井キお付何程とて、
一七日毎小切を付ること我邦おて、
毎月晦日を限おとるが如し、
其一七日の唱左の如し

マ
ン
デ
イ

日曜日
月曜日

チ
ユ
ウ
ス
デ
イ

大曜日

エ
ン
ス
デ
イ

水曜日

サ
ア
ス
デ
イ

木曜日

フ
ラ
イ
デ
イ

金曜日

サ
タ
デ
イ

土曜日

右の如く定てソンデイは休日おて、
高賣も勤も何事も休息おとることむ、
一の我邦の元日の如

一年の月の名

一年ハ十二小分チ十二箇月トモ其名ト日の數
 尤の如ク

月の名	日の數
ジャニユエリ	三十一日
ヘブリユエリ	二十八日
マアチ	三十一日
エプリル	三十日
メイ	三十一日
ジュン	三十日

右の如ク
 三月四月五月を春ト六月七月八月を夏ト
 九月十月十一月を秋ト十二月を冬ト
 三月四月五月を春ト六月七月八月を夏ト
 九月十月十一月を秋ト十二月を冬ト

時計の見様

西洋小てハ一昼夜を二十四時トに分つ由也彼の
一時的日本カの旧半時トあり其半時を六十小分トで
ふれを一分時ト（ニウト）といふ亦この一分時を
六十小分トで一セカンドトと云ふニセカンドハ大
抵脈の一動ト不同ト扱時計の盤面を十二トより
短針ハ一昼夜ト二度トづり廻り長針ハ二十四度
づり廻る仕掛トよせ先トづ正午ト又ハ夜半ト十二時
を本トと一この時トハ短針も長針も正トしく重トる

合トて十二時の所を指トとこれより段々ト右の方
へ廻り短針の一時を指トと又ハ長針ハ盤面を

一周トして六十分時を過ぎ又十二時の裏ト戻り

ふれより亦次第トに進ト短針の一時と二時との

間ト小来トるよりハ長針も盤面を半分ト廻りて三十

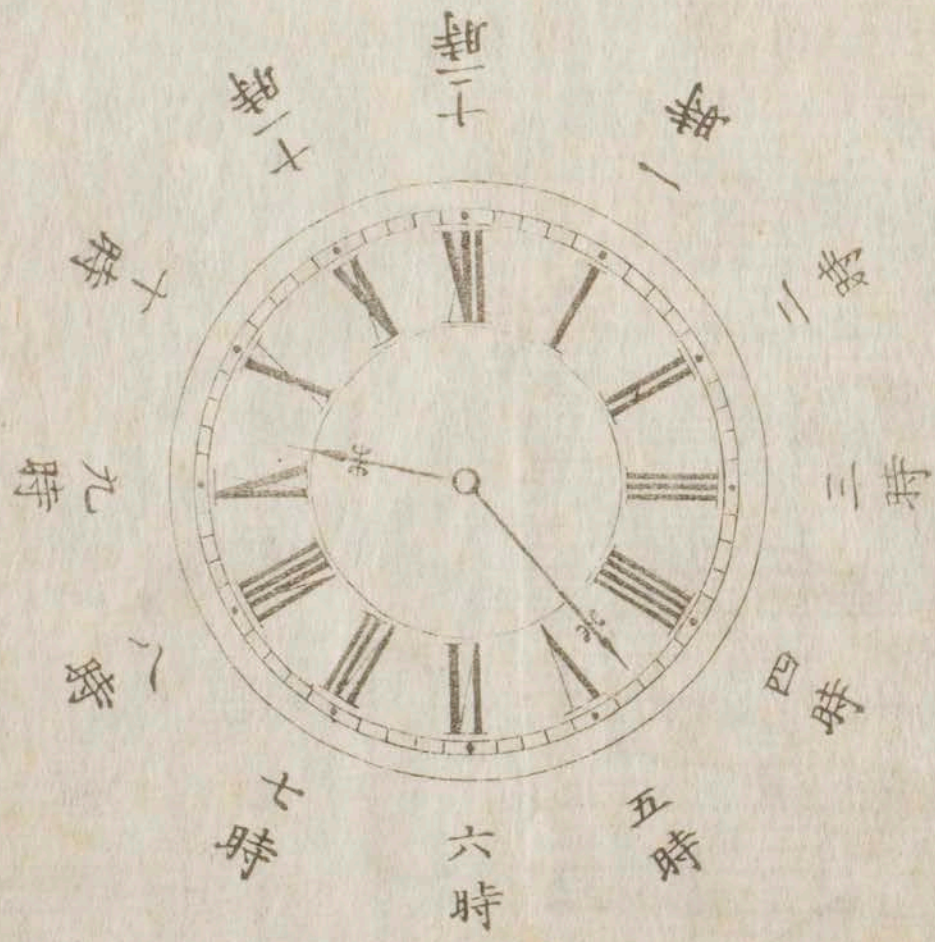
分時を過ぎ丁度六時の所ト小来トまり故ト小時計を

見て時トを知らトハ先トづ短計の指トを見トて次トぎ

ハ長針の居所トを見トるべし譬トへハ短針の指トを所

九時と十時との間トハ長針の指トを所二時の

時計の圖



裏ふれば九時過ぎ十分時ふりと云ふことなり
 又此短針九時と十時との間を半過ぎて十時の
 方小迎寄り長針も進で八時の所小来きバこれ
 を十時前二十分時と云ふ即ち其二十分時とハ
 長針の十二時の所小至る迄二十分時なりと云
 ふことにて何れも長針ハ十二時を本小盤面
 小ゆる六十の点を計へて何時何分時と云ふこ
 とを知るべし左小示と時計の圖ハ九時過ぎ二
 十分時の裏なり

福
18-1
著作

100

福 信 的 圖



Faint, illegible text surrounding the central diagram, possibly representing the twelve months or the twelve Earthly Branches. Some characters are partially visible, such as '一', '二', '三', '四', '五', '六', '七', '八', '九', '十', '十一', '十二'.